世の人の笑ひ二木にとゞまる、連だちての道中無用たるべし、あらきのどくといひしは、梅がえは身のたけひきく、櫻木はたけ高きを、彼およめに比て誹しなり、

〔兎園小說十一〕品革の巨女（オホチンナ）

文化四年丁卯の夏四月のころより、世の風聞にきこえたる、品川驛の橋の南なるこゝを橋むかふと唱ふるなり鶴屋がかゝえの飯盛女に、名をつけといへるは、この年二十歳にて、衣類は長さ六尺七寸にして、裾をひくこと一二寸にすぎず、膂力ありといへども、そのちからをあらはさゞりしとぞ、世に稀なる巨女なれども、全體よくなれあふて、しなかたち見ぐるしからず、顏ばせも人なみなれば、この巨女にあはんとて、夜毎にかよふ嫖客多かり、當時その手形を家嚴におくりしものあり、すなはち摹して左に載せたり、その手は中指の頭（サキ）より、掌の下まで、曲尺六寸九分、横幅巨指（オホユビ）を加へて四寸弱なり、その圖左のごとし○圖略　件のつたは出處駿河のものなりとぞ、ひが事をすとよまれたるいせ人にあらねども、阿漕の浦に引く網の、たびかさなれる客ならねは、手を袖にしてあらはさず、足さへ見するを恥ぢしとぞ、これらはをなごの情なるべし、あまりにいたくはやりにければ、瘡毒を傳染して、あらぬさまになりしかば、千鳥なくのみ客はかよはず、いく程もなく、その病にて身まかりにきといふものありしが、さなりやよくはしらず、又その翌年文化五年の冬のころ、湯島なる天滿宮の社地にて、おほをんなのちからもちといふものを見せしことあり、予はなほ總角にて、淺草のとしの市のかへるさに立ちよりて、それをば見けるに、よのつねのをんなより一歩大きなるは、偉きかりしが、品川のつたが手にくらぶれば、いたく見劣りて、さのみ多力なるものとは見えざりき、彼品川のおほをんなは是なるべしと、おもはする紛らしきものとしられたり、かばかりはかなきうへにだも、贋物いで來る、油斷のならぬ世にこそありけれ、こゝにすぎこしかたを思へば、十八九年のむかしになりぬ、時に筆研の間、亦戯れにしるすといふ、